

館蔵の『広韻』について

教養部助教授 岩田 憲 幸

本学中央図書館所蔵の稀観書の中に、『広韻』5巻5冊がある。いわゆる韻書に分類される書である。

韻書とは、本来、韻文を作る際、押韻字を選択するために利用した、韻^(註)分類による字典であるが、後には釈義、字体の面など内容的にも豊富なものが作られ、一般に言う辞書、字典としての役割も果たすことになった。

(注) 中国語の音節は、声母、韻母及び声調の3要素に分析される。うち、韻母はさらに、韻頭(介音)、韻腹(主母音)、韻尾に分かれる。ここでいう「韻」とは、韻母あるいは韻腹・韻尾の部分の音をいう。

中国では、古来、文人は詩文を作る習わしであり、また科擧の試験でも優れた詩賦を作ることが要求されたから、そのための工具書として、韻書は欠くことができなかった。

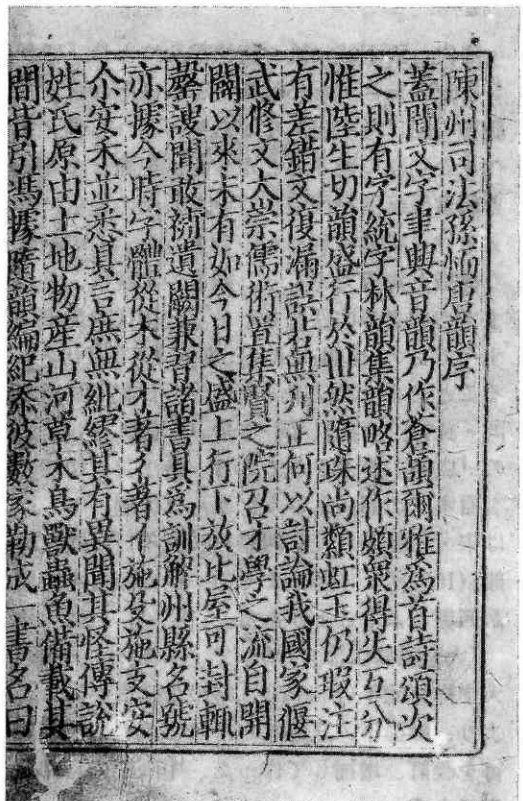
文献によれば、中国で最も古い韻書とされるのは、三国時代の魏の李登による『声類』であり、その後、晋・呂静『韻集』、梁・夏侯詠『韻略』、同・沈約『四声譜』、北齊・陽休『韻略』、同・李季節『音譜』、隋・杜台卿『韻略』といったものが陸続と著わされたが、これらはすべて現存しない。『十韻彙編』(劉復、魏建功、羅常培等編、北京大学、1936年)の「魏序」によれば、およそ韻書とおぼしき書名をもつもの(「音」、「声」、「韻」といった文字を含むもの)が、宋代までで、百六、七十はくだらないという。しかしこれらのほとんどは早くに佚し、現在完全な形で残っているのは10種前後にすぎない。

韻書の出現は、「反切」という表音方法の案出によって可能となった。

反切とは、ある一つの字音を、二つの漢字音を組合せて表示する、中国の伝統的な注音方法である。単に「反」とも「切」とも使わ

れることがある。

例えば本書『広韻』では、上平声字「東」に対し、「徳紅切」という音注を施している〔書影3参照〕。「徳」(これを反切上字という)で「東」(これを反切下字という)の字音の声母を表わし、「紅」(これを反切下字という)で「東」の字音の韻母及び声調を表わしている。



〔書影1〕

つまり、
徳 d(ə)k + 紅 (h)ōng → 東 dōng
というわけである(音価は平山久雄「中古漢語の音韻」、『中国文化叢書①言語』大修館書店、1977年による)。

こうした、2字でもって1字の音を綴り合わせるという方法は、音標文字の利用を知っているわれわれにとっては、まことに迂遠なものとしか思われぬが、それまでの「読若法」(同音または近似音による注音方法)や「直音法」(同音による注音方法)に比べれば^(註)、どんな漢字に対しても音を示すことができるという画期的な注音法として、その後長期にわたって行われた。

(注) 読若や直音による方法は、同音字や近似音の字がまったくない場合は利用できない。またかりにそれらの字があったとしても、それがほとんど用いられず、衆知のものでなければ、これらの方法はうまく機能しない。

隋代、天下統一後、陸法言らにより『切韻』5巻が著わされた(601年)。これはそれまでの韻書の中に種々出入りがあり、どれを是とすべきか判断に迷うことが多く、規範となるべき韻書の誕生を待望していた人々の要求に応えるべく編纂されたものであった。この絶大な権威と影響力をもった韻書の出現は、それまでの韻書の亡佚をもたらし、後代の韻書はすべてこの『切韻』を改訂、増補する形で出されることとなった。唐・王仁昉『刊謬補缺切韻』、同・孫愐『唐韻』、同・李舟『切韻』そして宋の『広韻』等がそれである。陸法言『切韻』(原本『切韻』という)から『広韻』、さらには宋・丁度等『礼部韻略』(1037年)、同左『集韻』(1039年)に至るまでの一連の韻書を切韻系韻書とよぶことがある。

『大宋重修広韻』、略して『広韻』は、宋の大中祥符元年(1008年)、時の皇帝真宗の命により、陳彭年、丘雍等がそれまでの切韻系韻書を改訂、増補して作った、中国初の官修韻書である。

官修の書であることは、書名に冠した「大宋」の2字によっても知られるが、「重修」と称するのは何ゆえかというに、それ以前太宗雍熙年間(984~987年)に、句中正等による『雍熙広韻』(佚)が撰定されており、これと区別するためである。

なお「広韻」という名称であるが、これは元来は固有の書名ではなかった。孫愐『唐韻』は陸法言『切韻』を改訂したものだが、この『唐韻』はしばしば「切韻」とも「広切韻」とも、また略して「広韻」ともよばれた。「広(切)韻」とは、「『切韻』を広げた」謂であろう。

『広韻』は、原本『切韻』以後の韻書を増訂してできた、いわゆる切韻系韻書の集大成の書である。この間約400年の時間が経過しているが、『広韻』の反切は、『切韻』の語音体系をほぼ忠実に保存していることがこれまでにわかっている。そのため『切韻』や『唐韻』の原本が亡佚して伝わらない今日、『切韻』成書当時の中古期の語音状況をうかがい知るうえで、『広韻』はなくてはならない最も重要な資料であり、さらにその先の上古期の語音を研究するうえでも、また後の近代、現代の語音を研究するうえでも最も有用な資料である。さらにこの書には、その後散佚した文献が豊富に引用されており、宋以前の古籍を研究するうえで有益である。また語彙研究にも重大な手がかりを提供してくれる。

『広韻』は5巻から成り、声調(高低アクセントの一種。当時の中国語には、平・上・去・入の4種の声調があった)の別によって、上平声=第1巻、下平声=第2巻、上声=第3巻、去声=第4巻、入声=第5巻と分かたれている。このうち、第1巻と第2巻の区分は、平声に属する文字の数が多いためにこれを上・下に分けたことによるもので、声調の違いによる分巻ではない。

各巻の内部は「韻」によって配列されている。『広韻』ではこの韻による部類分けが計206なされている。そしてこの206韻^(註)はさらに「小韻」に分かれる。小韻とは、完全に同音である(すなわち声母、韻頭、韻腹、韻尾そして声調のすべてが一致する)文字群に部類分けされた、そのそれぞれの類を指す。

(注) この時の「韻」は、これまで出てきた「韻」すなわち韻母あるいは韻腹・韻尾の部分の音をいうのではなく、それによって部類分けされた、そのそれぞれの類を指す。これを「韻部」ともいう。

『広韻』が刊行されるや、国定の韻書として文人必備の韻書となり、広く通行することとなった。ただしこの書にもいろいろ問題が多く、引き続き改訂の作業が続けられ、より簡略化された『礼部韻略』(原本佚)や、『集韻』(全10巻で、『広韻』の約倍の分量になる)が編纂された。

今日、一般に見られる『広韻』の版本には次のものがある。

1. 張氏重刊沢存堂本
2. 『古逸叢書』覆宋本
3. 涵芬樓覆印宋刊巾箱本
4. 曹刻棟亭5種本
5. 上海古籍出版社影印『鉅宋広韻』
6. 『古逸叢書』覆元泰定本
7. 『小学彙函』内府本

近年、朴現圭、朴貞玉共著『広韻版本考』(学海出版社、台湾、1986年)が出版され、『広韻』の版本に関しきわめて詳細な知識を得ることができるようになった。これによると、『広韻』には今までに80種にのぼる版本並びに鈔本が出されているという。同書はこの80種のそれぞれに綿密な調査・研究を行い、その結果を、系統関係が一览できる「広韻版本源流表」にまとめている。大変な労作であり、拙文の版本に関する記述は同書に負うところ大であることを申し述べておかねばならない。

さて本学所蔵の『広韻』であるが、一見していわゆる簡注本(簡本、略本ともいう)であることがわかる。簡注本とは繁注本(繁本、詳本ともいう)に対する称呼で、元代、収録字や文字の注釈などにおいて、宋本を少しく削減したものをいう。先に掲げた7種の版本のうち、1～5までが繁注本、6、7が簡注本である。

なお前掲書『広韻版本考』(以下『版本考』と略称する)では、版本の分類をより厳密に行い、詳本、略本、略多本、前詳後略多本の4種に分けている。

本学所蔵『広韻』の主だった特徴は次の通り。

1. 附録するのは書首の「陳州司法孫恂唐韻序」のみだが、この題記中の官名をたたく司法に作る(司馬に作るは誤まり)[書影1参照]。
2. 韻目^(注)一覧の1行は3韻を収める。韻目序数は陰刻[書影2参照]。

(注) 同じ韻に属する文字群の中から、その韻の名称として選ばれた代表字を「韻目」という。



〔書影 2〕

3. 上平声「東」の字注が、略本に比べ「舜七友」以下32字削られている。また「東方也」に作る[書影3及び5参照]。
4. 同じく「同」の字注が略本に比べ「亦州名」以下8字削られている[書影3及び6参照]。
5. 小韻収録字の順序が他の詳本、略本と異なる。例えば「東」及び「同」の収録字の順序に注意[書影3及び5、6参照]。
6. 第5巻末題を「広韻入声卷第五終」とする[書影4参照]。



〔書影 6〕

『古逸叢書』覆元泰定本（略本）

7. 本文行数毎半丁12行、19字〔書影1参照〕。
本文12行、注小双行、約31字〔書影3参照〕。

その他書誌的事項は次の通り。

序は四周双辺、匡郭16.1×11.2cm、本文左右双辺、匡郭16.5×11.2cm。有界12行注双行約31字。版心は細黒口、上下内向黒魚尾。題「句一（～五）」、各卷丁数、ままた刻字数を刻す。耳格「広句一（～五）巳（丁数）」。

以上の点から総合的に判断して、本学所蔵の『広韻』は、『版本考』にいう略多本^(注)系統に属する、同書名づくところの元建刊12行本であると思われる。（補注）

（注）略本よりさらに刪略された部分が多いもの。

刊記をとどめず刊行年次は特定しえない。ところで本書の左匡郭外には、蝴蝶装本に通例の耳格が刻されており、また宋王朝の諱が忌避されている。『版本考』ではそのため宋

末までさかのぼらせる可能性も考えている。しかし先の諱の忌避は必ずしも厳格でないこと、その他紙質、字様、摺刷の具合から総合判断して、今は元初刊、あるいは元刊としておくのが穏当かと思われる。

本書が学術上多大な価値を有することは疑いえない。

（補注）推定の根拠は『版本考』にもとづく。筆者自ら各種版本を目睹し、比較校合する機会を得ていない今、同書の研究にとりあえず従っておくしかなかった。強い断定表現を避けたのはそのためである。

同書の記述にも一部疑義がある。例えば本学所蔵『広韻』第5巻の末題は「広韻入声卷第五終」とするが、同書はこれを取りあげない。而して同じく略多本の一つ元建安余氏双柱書堂刊本ではこれを特徴の一つとして言及しているのは腑に落ちない。

また下平声韻目「九麻」を本文中では「九瘡」に誤まって作るが、これについてもとりあげない。また諱の忌避による欠筆についての記述も一部に疑問がある。その他細かい点を問題にしたらきりがなほどである。

ここでの推定が正しければ、この種の版本所蔵者として、慶応義塾大学附属斯道文庫（ただし取合せ本）日光輪王寺、北京図書館及び日本の某人の4者があげられる（『版本考』）。日本の某人私蔵本につき『版本考』の著者は、「本書はかつて昭和51年東京古典会で入札され、現在日本の某人に私蔵さる。印面は精美にして、金鑲玉装。中に朱墨の批校あり」と記す。

本学所蔵本には蔵書印など一切なく、この書の来歴を知るすべがないが、印面は確かに精巧美麗であり、また元本の上下の部分に入紙を加えた金鑲玉とよばれる特殊な装訂に改装されている。さらにごく一部だが、朱による書き込みもある。本学所蔵本がこれにあたるのかもしれない。

（中国語学専攻）

